キリストは死者の中から復活し

コリントの信徒への手紙Ⅰ　１５：１２－２０

司祭　ヨハネ 井田　泉

2025 年 2 月 16 日

顕現後第 6 主日

聖光教会にて

今日は、使徒書の最後の言葉を大切に心にとめましょう。

「しかし、実際、キリストは死者の中から復活し、眠りについた人たちの初穂となられました。」コリントⅠ 15:20

元はキリスト教の迫害者パウロ。主イエスと出会って回心し、逆に熱烈なキリスト教伝道者となったパウロ。彼は遠く旅をしていくつもの教会を設立し、多くの人々を救い、またたくさんの手紙を記しました。今日読まれたのはその一つ。当時ギリシャの大都会、コリントの教会に宛てた手紙です。

そのパウロにとって最も大切であったことは何かというと、**「イエス・キリストの十字架と復活」**です。「キリストの復活」、言い換えれば「復活のキリスト」。復活のキリストが彼のうちで燃えていたので、彼は苛酷な困難の連続に耐えて、生涯をイエス・キリストを伝えるために献げたのでした。

「しかし、実際、キリストは死者の中から復活し、眠りについた人たちの初穂となられました。」

ただキリストが復活した、というだけではないのです。それはわたしたちのためだった。**キリストは眠りについた人たちの初穂となられた。**つまりイエスが最初の者となって、眠りについた、つまり死んだ人たちがそれに続く。死んだ人々、またやがてはわたしたちすべてが復活して新しい命に生きるために、キリストがその初穂、第１号となられた。

キリストの復活があるからこそ、わたしたちの存在はいつか

は終わって消滅するのではなく、新しい体をもって復活するのだ。――これを受け入れてこれを信じて、希望と力を得てほしい。これがパウロの切なる願いです。

このコリントの信徒への手紙Ｉの第 15 章全体を費やして、パウロはキリストの復活と、それによる死者の復活を語ります。

このことについては最後にもう一度触れることにして、今日は別のことをお話しします。今日 2 月 16 日は、わたしが愛してやまない韓国・朝鮮の詩人、尹東柱（ユンドンジュ）の逝去 80 年の日です。

尹東柱。彼は 1917（大正 6）年、朝鮮東北部から中国に入ったあたり、北間島（プッカンド）と呼ばれる地域の明東（ミョンドン）という村で生まれました。村全体がキリスト教です。彼は生まれてすぐに幼児洗礼を受けました。平壌（ピョンヤン）およびソウル（当時、京城）のキリスト教系学校で学び、やがて日本に留学して立教大学、ついでこの京都の同志社大学英文科で学びました。1942 年、今から 80 年と少し前のことです。彼が下宿していたのは左京区田中高原町。叡電の茶山の近くですから、ここからそれほど遠くありません。このあたりまで散歩してきて、聖光幼稚園の園児たちの歓声を聞いたかもしれません。

翌 1943 年、夏休みで帰省する準備をしていたところ、下鴨警察の特高に逮捕されました。「治安維持法違反」の罪名で京都地方裁判所で懲役 2 年の判決を受け、1945 年 2 月 16 日、福岡刑務所で獄死しました。満 27 歳。あと半年待てば日本は敗戦、朝

鮮は解放を迎えるはずでした。ちょうど 80 年前の今日です。

彼は何も秘密結社を作って独立運動をやったわけではありません。ただ失われていく、奪われていく朝鮮語、朝鮮文化を愛して、その大切さを友人たちと語り合った。祖国の独立を願った。自分のその言葉で詩を書き、日記を書いた。それが日本の「國體」に反逆する犯罪とされたのです。

今日は彼の代表作と言われる「序詩」をご紹介します。1941 年 11 月 20 日の日付がついています。延禧(ヨニ)専門学校（現在の延世(ヨンセ)大学校）卒業の直前でした。

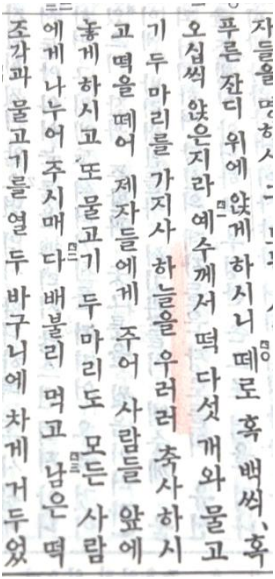
서시↵	**序詩**
↵	
↵	
죽는 날까지 하늘을 우러러↓	死ぬ日まで天を仰ぎ
한점 부끄럼이 없기를,↓	一点の恥なきことを、
잎새에 이는 바람에도↓	木の葉に起こる風にも
나는 괴로워했다.↓	わたしは苦しんだ。
별을 노래하는 마음으로↓	星をうたう心で
모든 죽어가는 것을 사랑해야지↓	すべての死んでゆくものを
그리고 나한테 주어진 길을↓	愛さなければ
걸어가야겠다.↵	そしてわたしに与えられた
	道を歩みゆかねば。
오늘밤에도 별이 바람에 스치운다.↵	今夜も星が風にさらされる。

「天を仰ぎ」――これは福音書のイエスの姿を思わせます。韓国語の聖書にまさしく「하늘을 우러러」（ハヌルル ウロロ）が出て来るのです。たとえばマルコ福音書第 6 章 41 節

「イエスは五つのパンと二匹の魚を取り、<u>天を仰いで</u>賛美の祈りを唱え、パンを裂いて、弟子たちに渡しては配らせ、二匹の魚も皆に分配された。」

また同じマルコによる福音書第 7 章 32 節。

「人々は耳が聞こえず舌の回らない人を連れて来て、その上に手を置いてくださるように願った。」


자들을 명하시고
푸른 잔디 위에 앉게 하시니 떼로 혹 백씩, 혹
오십씩 앉은지라 예수께서 떡 다섯 개와 물고
기 두 마리를 가지사 하늘을 우러러 축사하시
고 떡을 떼어 제자들에게 주어 사람들 앞에
놓게 하시고 또 물고기 두 마리도 모든 사람
에게 나누어 주시매 다 배불리 먹고 남은 떡
조각과 물고기를 열 두 바구니에 차게 거두었

当時の聖書「ハヌルル ウロロ」

そのときイエスは指を彼の両耳に差し入れ、それから唾をつけてその舌に触れられた。**「そして、<u>天を仰いで</u>深く息をつき、その人に向かって、『エッファタ』と言われた。」**

イエスは、人々の飢えを心配し、**「天を仰いで」**祈られた。人の苦しみに嘆息して「天を仰」がれました。天を仰いで祈られた後、祝福の出来事が起こります。

尹東柱は幼いときから聖書を読んで成長しましたから、この福音書のイエスの**「天を仰いで」「하늘을 우러러」**（ハヌルル ウロロ）をよく知っていたはずです。人々の飢えや苦しみを心配して祈られるイエスの祈り、願い、呻き、それを尹東柱は自

分の祈り、願い、呻きと重ねていたのではないでしょうか。イエスの道を思い、自分に与えられた道を思って、神の前に、良心に一点の恥のない生き方をしたい。

「星をうたう心で／すべての死んでゆくものを愛さなければ／そしてわたしに与えられた道を／歩みゆかねば。」

星は天から差してくる光です。またその星とは、自分の願い、祈りなのかもしれません。

「今夜も　星が 風にさらされる。」

星は激しい風に吹きさらされる。風は時代の悪しき風ともとれ、あるいはそれとは違って自分を促す聖霊の息吹ともとれます。風にさらされつつ、命あるもの、死んでいくものすべてを愛して生きていきたい。その姿勢をしっかり保って歩んでいきたいのです。

「わたしに与えられた道を／歩みゆかねば。」

翌年 1942 年春、彼は海を渡って立教大学に留学しました。そこで1学期を過ごしたあと、秋には同志社大学に移ります。翌年 1943 年 7 月、彼は特高に逮捕され、懲役 2 年の判決を受けて、福岡刑務所に投獄されます。獄中から家族に月に1枚だけ葉書を出すことが許された。彼は「英和対訳聖書を送ってほしい」と頼んだ。家族から送られてきたその聖書を、彼は毎日独房で読んでいたでしょう。聖書の言葉こそが、彼の生きる力だったはずです。

1945年2月16日未明、午前3時36分、彼は息を引き取りました。尹東柱の最期について福岡刑務所の看守のひとりは次のように語ったと言われます。

「東柱さんは、何の意味かわからぬが、大声で叫び絶命しました。」

イエスの最期とあまりにも似ています。満27歳でした。

日本の国は彼を死に追いやりました。ほんとうに痛ましく、日本人として申し訳なく思います。

けれども彼の同級生であり竹馬の友であった文益煥（ムンイックァン）牧師――韓国の民主化運動のリーダーのひとりであった方――は、尹東柱への追悼文でこう言っています。

「彼にあってはすべての対立は解消された。その微笑にただようあたたかさに解けぬ氷はなかった。すべての人が血を分けた兄弟だった。わたしは確信をもって言うことができる。福岡刑務所で息を引き取るとき、彼は日本人のことを考え涙を流しただろう、と。」

「彼の追憶を書くことによって、わたしの人生は清らかになる。それほど彼の人生は清らかだった。」

「死ぬ日まで天を仰ぎ」　わたしたちも天を仰ぎ、神に与えられた道をまっすぐに歩みたいという願いが起こります。

今日の使徒書を思い起こしましょう。

「しかし、実際、キリストは死者の中から復活し、眠りについた人たちの初穂となられました。」コリントⅠ 15:20

尹東柱はキリストの復活によってよみがえります。またわたしたちも、キリストの復活によってよみがえります。イエス・キリストの十字架のゆえに、和解が与えられます。

わたしたちの生涯の終わりが来ても、それで消滅、滅びではありません。キリストの復活のゆえに、わたしたちも復活させていただく。わたしたちが死ぬときはキリストの死と一つになって死ぬので、キリストの復活と一つになってわたしたちも復活する。このような不思議な恵みを与えられているのがわたしたちです。

お祈りします。

神さま、今日パウロをとおしてキリストの復活を聞きました。キリストの復活によってわたしたちに約束されているわたしたちの復活と永遠の命を思い、希望を抱かせてください。その希望に支えられて、わたしたちに与えられた道を歩ませてください。主イエス・キリストによってお願いいたします。アーメン